



【11】動き出した「文化のみち」…命名の妙

1 その後の歩み

白壁地区が今日のような形で保存に動き出したのは、既述のように平成7年の4月でした。ところがそれから2年程は、行政側を中心に、恐る恐る建物の保存を行うのが精一杯でした。

しかし9年春、名古屋城から徳川園までの区域が「文化のみち」と名づけられ、白壁地区がその中心になりました。そのころから一般にも白壁地区の近代建築が注目を集めるようになり、白壁アカデミアの設立など、民間からも建物の保存の要請が出てきました。そして動きは、町並み全体の保存へと発展していくことになったのです。もちろん、相変わらず建物の除却・マンション化という動きもありましたが、確実に、白壁地区への要請が変わってきたように感じました。

今回は、「文化のみち」の中に入った白壁地区が、その後どのように変化していったかを追ってみたいと思います。

2 できていく「文化のみち」

(1) 誕生から定着へ

名古屋城と徳川園は、近世の武家文化を伝える、名古屋が誇る遺産です。しかし近くに



図1 「文化のみち」は名古屋城から徳川園までのゾーン(空色の破線)で示される(名古屋市HP)

ありながらそれらの連携が取れていませんでした。そんなとき、それらの中間に近代建築で注目を集める地域が生まれました。そこで、それらをひとまとめにした観光エリア「文化のみち」が考えられたのです(図1)。その命名経緯は定かではありませんが、近世+近代、武家文化+建築文化を合わせて、「文化」という言葉で表したのではないのでしょうか。そして当初は「道」とされていたものが、道路との誤解と政策の広さから「みち」に変えられたのです。

そして、まず「榎木館」。続いて「旧豊田佐助邸」の近代建築物の公開ができました。命名されて2、3年で、ボランティアのガイドの誕生、「歩こう!文化のみち」というイベントの開催、高級なレストランの開店と続いたのです(図2)。そうして地元「文化のみち」が受け入れられていったのではないのでしょうか。

平成	近代建築 公開	関連施設 開設	その他事業等 開始
7			
8	榎木館 仮公開		
9			「文化のみち」命名
10			市民塾・白壁アカデミア設立
11	旧豊田佐助邸 公開		
12			「歩こう!文化のみち」開催
13	旧春田鉄次郎邸 公開	R「デュボネ」開店	ガイドボランティア 開始
14			
15			
16		R「G キタムラ」開店	
17	二葉館 開館		
18		堀美術館 開館	巡回バス「メーグル」運行
19	百花百草 開館		
20			「白壁アカデミア」10周年
21	榎木館 本運用		
22			
23			ガイドボランティア10周年
24			
25			
26			「歩こう文化のみち」15回
27			

図2 「文化のみち」の施設整備等の経過

その後、美術館の開館、「二葉館」や「百花百草」等の近代建築の公開、さらには名古屋駅から文化のみち等の施設を回る「メーグル」という巡回バスも生まれました。「文化のみち」は、名古屋の新しい観光地の一つとして定着することになったのです。

(2)白壁地区の近代建築

「文化のみち」は、最初は名古屋城と徳川美

術館が中心でした。しかし最近では、白壁地区も「大正ロマン」を売りに、健闘しています。これまで紹介した旧豊田佐助邸、榎木館、旧春田鉄次郎邸、二葉館などの内部公開施設の他にも、白壁地区には近代建築がいくつもあります。そのいくつかを紹介してみましょう。
 <主税町教会> -主税町筋-

明治20年に名古屋で初めてできたカトリック教会とされます。聖堂は同37年、信者会館も古い建築です。庭には明治時代築というルルドもあります。礼拝の場所も最近まで畳敷きの床が残っていました。

<桜井邸> -白壁町筋-

明治39年、桜井善吉自らが設計した洋風住宅。白壁地区の住宅では最も古いものとされます。こじんまりした住宅ですが、現在もお住まいの「現役」の建築です。

<料亭「か茂免」(旧中井邸)> -白壁町筋-

大正8、9年に紙商で活躍した中井巳治郎の屋敷として建てられました。昭和初期には軍人だった東久邇宮や賀陽宮の官舎として使われています。戦後は料亭の「か茂免」になりました。

<「百花百草」-旧岡谷邸-> -白壁町筋-

大正9年、岡谷家の居宅として建築されたものを、書院、茶室、土蔵を改修し、多目的ホールを新築して開館しました。ピアノの生演奏をバックに、四季の花が溢れる美しい庭園が楽しめます。

<金城学院 栄光館> -長堀町筋-

昭和11年、金城学院の講堂として建築されました。佐藤鑑、城戸武男の設計です。スペイン瓦と白い壁が印象的な大型の建物です。

* * *

このほかにも、大正初期建築の大森家、伊藤家の住宅。旧近藤友右衛門邸、旧矢田績邸、旧西川秋次郎や盛田邸、そして旧料亭「樟」など、戦前からの多くの建物が残ります。

〈地下鉄高岳駅から〉

地下鉄の高岳駅の1番出入口を出て、高架道路の道を北に進みます。10分ほど、東片端の交差点を過ぎて1本目が、榎木町筋です。

右に曲がるとすぐ左は、大正初期建築の大島家と伊藤家の住宅が並んでいます。東に進み、マンションの間のお屋敷が、三井銀行の支店長として名古屋に大きな足跡を残した「旧矢田績邸」です。ひところは榎木町倶楽部と呼ばれ、財界人の集まる場所でした。



伊藤家などが並ぶ「榎木町筋」



煙突のある「旧矢田績邸」

ひとつマンションを越えると「榎木館」になります。右側の山吹小学校付近は元市立第三高等女学校でした。次に交差する道は鳥屋筋と呼ばれます。その左に、戦後のものだと思いますが、長屋が残っています。こうしたものも保存してゆきたい建物です。

まっすぐ進むと「二葉館」になります。左に曲がると、次の道が主税町筋です。左折すると、すぐ右に重厚な門のお屋敷があります。ここは豊田佐吉の片腕として活躍した「旧西



「二葉館」前にあるメーグルのバス停(左側)



豊田の番頭とも言われた「旧西川秋次邸」



近代の絵画が陳列される「堀美術館」

川秋次邸」です。

西に進むと左側にレストランがあります。先に紹介した「ラ・グランタール・ドゥ キタムラ」です。旧井上五郎邸を改修して開店しました。その斜め前に、この地区最初の美術館、「堀美術館」が開館しました。ダイテック社長のコレクションの展示で、近代の著名作家の作品が中心の美術館です。少し行くと再び鳥屋筋の角です。

〈金城学院へ〉

角を過ぎると右側に「旧豊田佐助邸」、「旧

春田鉄次郎邸」と続きます。春田邸の中にはレストランの「デュポネ」があります。そして大きな結婚式場を過ぎると静かな料亭「香楽」です。なかなか中に入れぬお屋敷です。

次の角の左に、この地区で最も古いとされる「主税町教会」があります。現在昭和区にある南山大学は最初はここが検討されたといわれます。

北に進み、次の角を曲がると白壁町筋です。右側のマンションの向こうに黒い塀のお宅が続きます。旧旅館の「樟」、そして「百花百草」です。百花百草は旧邸宅を改修、公開された施設で、有料ですが、中にはホール(喫茶のできる休憩所)とお花畑があり、ピアノの生演奏もあります。その先の右側には、ソニー創業者につながる「盛田邸」、明治建築の「桜井邸」と続きます。左側は門・塀が残された「旧豊田利三郎邸」のマンションが。そして少し行った角の手前右側の白い塀は「旧中井邸」の料亭か茂免です。



名古屋最古のカトリック教会の「主税町教会」



四季を通じて美しいお花畑のある「百花百草」



戦前は宮様も住んだ「旧中井邸」(現:「料亭 か茂免」)

鳥屋筋の角の少し向こうにはマンションになった旧櫻明荘の長屋門があり、その向こうに「旧近藤友右衛門邸」もあります。その先の左は金城学院です。手前を左折して北側にまわると、正門の中に、「栄光館」という講堂があります。(現在学院は大工事中で中に入れません、)この地区には珍しいコンクリートの近代建築です。東にすぐの所に、都心に向かう基幹バス停があります。

4 命名の大切さ

白壁地区が成長した過程を見ると、やはり「文化のみち」という命名が大きな意味を持っていることに気が付きます。命名は、その概念を固め、広く提示することになります。「文化のみち」は両端の名古屋城と徳川美術館の力を借りてスタートしましたが、今は、白壁地区が中心になっている感があります。そして、自から「文化」のまちへと進むようになりました。

反対運動の例にはなりませんが、愛知万博の時は「海上の森」、庄内川河口干潟の保存では「藤前干潟」という、希望のような、新しい造語の命名が運動を引っ張りました。

命名は、情報のイメージを素早く伝達します。そしてその方向に進む道を開いてくれる可能性もあるといえそうです。

〈主な参考文献〉

①瀬口哲夫『名古屋の近代住宅』(2003、自費)